A Framework of Conversation Analysis of the Japanese Expression 'Sou-desu-ne' from an Ethnomethodological and a Psychological Points of View.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshimura, Hirokazu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7516

「そうですね」の会話分析の枠組み

――心理学とエスノメソドロジーからの検討――

文学部助教授
吉 村 浩 一

A Framework of Conversation Analysis of the Japanese Expression *'Sou-desu-ne'* from an Ethnomethodological and a Psychological Points of View.

Hirokazu YOSHIMURA

ABSTRACT

Recently *'Sou-desu-ne'* ('yes', 'that could be so...', and 'well, let me see...' as translated in English) is used so frequently in Japanese conversation that it is difficult to identify the meaning. It can express not only agreement but mild disagreement. Its meaning extends from the positive to the negative according to the situation. The topic can be analyzed from a linguistic point of view, but in this article I discussed the expression from an ethnomethodological and a psychological view point.

In ethnomethodology which is a school of sociology originating from phenomenology, the phrase *'Sou-desu-ne'* could be regarded as a tool to start the response in the <question-response> pair. I proposed the function of the phrase should be identified as a "shock absorber", and is different from the similar function "filler", such as *'Anoh'* or *'Eeto'*. In order to examine the expression from a psychological point of view, two experimental methods are suggested: one is factorial analysis and the other is single-S approach. In the final section, I proposed the systematic collaboration of the two disciplines of ethnomethodology and psychology as an approach for examining everyday conversations.

KEY WORDS

Conversation analysis, Ethnomethodology, filler, adjacency pair

はじめに

本稿のタイトルが，“「『そうですね』の会話分析」の枠組み”と，入れ子構造になっている点に注意を促したい。本稿で，「『そうですね』の会話分析」そのものを行おうとするのではなく，そのための“枠組み”を考えようというのである。「『そうですね』の会話分析」そのものを行うには，日常生活で「そうですね」がどのように使われているかを，適切なサンプリングを踏まえてデータ収集してかかることが必要である。少なくとも心理学では，そうしたデータに基づいて，客観的・定量的分析を進めてゆく。本稿では，もしそのような分析を行うなら，どのような問題設定と技法を携えて系統だった切り込みを行えるかの見通し（枠組み）を提案したいのである。

「そうですね」という言い回しは，最近，耳障りなほど頻繁に使われている。筆者自身も，知らないうちにしばしば口にしている。会話場面での相手への応答を，まず「そうですね」と受けてから始める。その使われ方には，この言葉本来の意味である“肯定”がほとんど読み取れない場合も

多い。試しに，テレビをつけて，インタビュー場面を聴いてほしい。アナウンサーからの質問に対し，ゲストがしきりに使っている。濫用とも思える多用ぶりである。そこに，この言葉が〈質問－応答〉事態で便利な装置として働いていることを読み取るべきである。

“エスノメソドロジー”という学問がある。誰が決めたわけでもなく，人々（エスノ）は日常生活で暗黙の了解のうちに利用し合っている方法（メソッド）をもっている。その定式化を目指すのがエスノメソドロジーである。現象学の流れを汲み，社会学の中で生まれ，“いまここで”を大切にするエスノメソドロジーは，会話場面でのエスノ・メソッドを重要な研究対象として取り込み，“会話分析”と呼んで重視している（本稿では，“会話分析”をエスノメソドロジーにおける学的行為を表す用語として用いる）。「そうですね」の多用現象については，当然のことながら会話分析からも重要な検討枠組みが得られるに違いない。そこで，本稿の柱の１つに，エスノメソドロジーにおける“会話分析”を据えたい。

もう１つの柱は，心理学的分析法である。特に，客観性・定量性を標榜する立場から，「そうですね」の使われ方にどのような分析枠組みを与えうるか。現実場面での一回性の発話行為を例示することにより会話装置としての分析を目指すエスノメソドロジーとは違って，心理学ならどのような枠組みが提案できるか。エスノメソドロジーや言語学の研究方法を批判するのではなく，会話分析の方法論を異なった面から補強することを目指したい。

こう書けば，エスノメソドロジーより心理学研究法の方が優れているように受けとられるかもしれないが，それは誤りである。本来なら，会話場面における話し手と聞き手の心のダイナミズムを，心理学は自らの問題として適切な方法論を携えて検討してゆくべきである。にもかかわらず，それをできずにいた。心理学に先んじて果敢に切り込んでいるエスノメソドロジーに，まず敬意を表したい（心理的事象に対するエスノメソドロジーの利用については，吉村，1998を参照してほしい）。その上で，心理学が提供できる枠組み強化策を考えてゆきたい。

１節　「そうですね」現象

会話場面における「そうですね」の最近の濫用ぶりを知るには，テレビやラジオのインタビューを聞いていれば分かる。聞き手（インタビュアー）の問いかけに対し，解答者がまず「そうですね」と受けて話し始める場面にたびたび出くわす。「そうですね」は，本来，肯定の意味をもっているはずだが，頻繁に用いられる「そうですね」には，必ずしも肯定の意味はない。その点が，“濫用”との評価を下す理由である。本稿で取り上げる「そうですね」は，このように肯定の意味が希薄になった使われ方である。

典型例は，サッカーやプロ野球などのスポーツ番組での，試合終了後の選手へのインタビューである。もちろん，多用する人とそうでない人がおり，その意味で個人の癖という面もあるが，それだけではすまない多用ぶりである。

この言葉が，本当に昔に比べて多用されているのか。もしそうなら，それはいつ頃からか。この点を吟味するには，同じような状況でのサンプル・データを経年的に比較するのがよい。幸い，プロ野球放送はずいぶん昔から行われており，試合後のインタビューも同じようなスタイルで繰り返されている。ほかにも，プロ野球中継のアナウンサーと解説者のやり取りからもデータを得ることができる。「家庭医学」に関する番組で，司会者と解答者である専門医のやり取りも適当なデータ源となろう。

経年的変化とは別に，どのような状況で多用されるかを分析することも大切である。先に指摘したように，「そうですね」は本来，“肯定”の意志表示であるのに，必ずしもそのような意味を背負わずに使われている。“肯定の希薄化”が，第１の検討課題となる。また，筆者の観察するところでは，公共性の高い状況での方が，日常のプライベートな会話場面よりも頻繁に用いられるようで

ある。

議論を具体的に進めるために，本稿では，これら２つの要因，すなわち“肯定の希薄化”と“公共場面性”という次元が，本当に出現頻度に反映されているかどうかを取り上げたい。ただし，“枠組み”の提案を目指す本稿では，これら２つの仮説に対する真偽をデータに基づいて検討することはしない。あくまで，どのような枠組みのもとでの検討が可能かを論じるにとどまる。

“公共場面性”要因から考えよう。筆者が，「そうですね」が耳障りだと感じたのは，テレビのスポーツ中継を見ているときであった。このような番組では，スポーツの種類にかかわらず，アナウンサーと解説者がペアとなって中継が進められる。たとえば，２時間半のマラソン中継がある。アナウンサーが発する質問に対し，解説者はしきりに「そうですね」で受けてコメントを開始する。走り始めて10kmあたりでこの応答ぶりが耳につき始めると，あとはもう，「また言うぞ」と強迫的に身構えてしまう。そして，その強迫観念が裏切られたためしがない。ついには，アナウンサーにまで，「そうですね」が乗り移っている。42.195kmのあいだに，選手の名前やマラソン用語をはるかに引き離して，「そうですね」が最も多く発話された言葉になっていると言っても過言でない。

次のような思考実験を行ってみる。先ほどの解説者が，あるマラソン・チームのコーチと一緒に，テレビでこのマラソン中継を見ている。コーチは，日本のマラソン界の事情に詳しいこの解説者から，自分のチームのレベル向上に役立ちそうなことを，テレビ中継を見ながら，いろいろ質問している。この事態は，先ほどのテレビ中継での解説という“公共場面”とはずいぶん違う。コーチに個人的サジェッションを行うという“プライベート状況”である。さて，この解説者が発する「そうですね」の頻度は，どうなるだろうか。テレビ解説の場合よりずっと少なくなるのではないだろうか。特に，２人が懇意な間柄なら。

次に，“肯定の希薄化”要因である。本来は肯定の意味をもつ「そうですね」が，その意味に縛られず用いられることは，応答者が質問内容に積極的に賛同する意志をもたないときにもこの言葉を発することを意味する。いわば，「あまりそうだとは思わない」状況で「そうですね」と言うことになる。これは，ベイトソン（1972/1986）の言う“ダブル・バインド”状況と類似する。彼は，言葉としぐさの二重拘束性に“ダブル・バインド”という用語を与えたが，「そうですね」の場合は，単一の言葉に二重のメッセージが込められている。同意から非同意までの幅広い応答を受け持つ言い回しになっていることが，「そうですね」の多用を促しているようである。

本稿では，「そうですね」という日常の何気ない言い回しを具体的材料として，会話分析からの取り組みと，心理学からの検討可能性を併置させ，分析の枠組みを比較・発展させる試みを行ってゆきたい。

２節　エスノメソドロジーの分析手法

現象学の流れを汲み社会学の中から生まれたエスノメソドロジー。序論で述べたように，その研究においては“会話分析”が重要な研究手法である。会話分析では，たとえそれが長いものであっても，日常会話から“隣接ペア”と呼ばれる一対の発言単位を抽出する。たとえば，〈挨拶－挨拶〉〈質問－応答〉〈招待－受諾〉〈非難－謝罪〉などである。本稿で取り上げる「そうですね」は，〈質問－応答〉ペアにおいて頻出する。

会話分析では，会話内容の分析よりも，会話構造の定式化に力を入れる。隣接ペアを抽出するという作業も，まさに構造に着目する行為である。ここでは，〈質問－応答〉という類型の中に「そうですね」を位置づけることによって，この言葉を“会話分析”する枠組みを考えてゆきたい。

〈質問－応答〉ペアにおいて質問者から発せられた〈質問〉は，応答者による〈応答〉を自然に導く。“自然に”と書いたが，エスノメソドロジーでは，社会・文化を共有する人々のあいだに，それを「自然だ」と感じさせる社会規範があると考

える。ただしそれは，人々のあいだで意識化された人工的・法的約束事ではなく，“見られてはいるがしかし気づかれずに”（seen but unnoticed）いる“背後期待”（background expectancies）だと位置づける。ガーフィンケル（1964/1995）は，このような社会秩序を支える“共通理解”（common understanding）を定式化してゆくことがエスノメソドロジーの仕事だと言う。

ここで，これまでに試みられてきた，「そうですね」と類似する言葉の会話分析を見ておきたい。具体的には，「ええと」と「あの（ー）」である。このような発話は，これから発言すべきことを思案中であることの標識と考えられている。肯定の意味を失った「そうですね」にも，これらと共通する面がある。

定延・田窪（1995）は，「ええと」と「あの（ー）」には，使われ方に微妙な違いがあると言う。特に，聞き手が存在する場合には，「ええと」は話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働き，一方「あの（ー）」は，遮断の程度が「ええと」より弱い。したがって，話し手はどちらの標識を用いるかによって，聞き手に対して自分が現在，どのような心的操作を行っているかを明らかにするとともに，それによって聞き手は，話し手が続いて何を語るかを予測することができると言う。会話装置として捉えたとき，「ええと」と「あの（ー）」には，このような機能差を見て取ることができる。

西阪（1999）は，「あの（ー）」（など）を，話し手と聞き手の相互行為上の働きとして定式化する。彼は，「あの（ー）」（など）を，“適切な「話し手／聞き手」関係を整序する工夫”と位置づけ，次のような規則を掲げる。

> その当該の相互行為状況において，特定のことがらを「受け手に合わせてデザイン」しながら適切に語っていくうえで困難があるとき，話し手は，その困難を解決するために，その発言を「あの（ー）」（など）によって有識化してよい。
> （p. 89）

このように，「あの（ー）」と「ええと」は，「そうですね」に先行して会話分析の検討対象とされてきた。

定延・田窪（1995）が指摘するように，「ええと」や「あの（ー）」は，“フィラー”による言葉探しと位置づけることができる。“フィラー”とは，発言権維持のための“間をつなぐ”言葉である。「そうですね」も，同じく“フィラー”の働きをもつと考えてよい。しかし，「そうですね」は，「ええと」や「あの（ー）」と相互行為上の装置としてはっきりとした違いをもつ。それは，聞き手からの問いかけに対する応答の冒頭位置に頻出し，この位置に必要な相互行為上の役割を担う点である。“フィラー”として大きく括るのではなく，さらなる特定化を目指す必要がある。

会話場面では，“長い間”は嫌われる。特に，インタビューなどの〈質問－応答〉事態は，応答者が専門家であると位置づけられているため，応答者の順番取り場面での沈黙は，応答者のとまどいないし専門的能力の低さと受け取られかねない。したがって，質問者からの問いかけに対し，間髪を入れず応答を開始する圧力がかかる。テレビやラジオでのインタビューなど公共性の高い事態では，その要請はいよいよ強くなる。ところが，何らかの事情で，質問にフィットする発言が行いにくい場合には，体勢を立て直すための“フィラー”が必要となる。西阪の言う「受け手に合わせたデザイン」を整えようとする事態である。

「そうですね」は，そうした事態で多用される。したがって，この言葉は，応答時の“ショック・アブソーバー（緩衝装置）”の機能を担っていると提案したい。質問内容と応答内容が必ずしもしっくりいかないとき，「そうですね」により，両者の衝突や違和感を緩和するのである。

緩衝装置となるための要件は何か。それは，あまり強い限定的意味をもたないことである。したがって，「そうですね」に本来の肯定の意味しかなければ，緩衝装置としては不適当である。肯定から弱い否定までの幅広い受け方を許容できるようになったことに，「そうですね」が緩衝装置と

して機能する理由がある。多くのインタビュー事態で，専門家は自分の枠組みから話したいことをもっている。しかし，聞き手がそれをうまく問うてくれるとは限らない。そのようなとき，「そうですね」は自分がこれから述べたいことへの調整装置として，実に好都合な言い回しとなる。その便利さが，耳障りなくらいの多用を生んでいる。「そうですね」の会話分析に際しては，このような枠組みをかぶせることができる。

実際の会話場面でデータを集めるには，上に示した“枠組み”を乱すやっかいな問題が予想される。たとえば，他の“フィラー”である「あの（ー）」や「ええと」と同様，応答者は「そうですね」をほとんど意味のない習慣化した口癖のように用いていることが多い。このような口癖を，ショック・アブソーバーとしての「そうですね」と同等に扱ってよいのか。もし，不都合なら，“口癖”として排除すべき「そうですね」とどのような基準で分ければよいのか。典型例を掲げることによって見解を示してゆくエスノメソドロジーにとって，口癖的用例はやっかいである。主張する見解に反する用例もあるということは，掲げた典型例の恣意性を問われることになりかねないからである。この点を手がかりに，科学性・客観性を標榜する心理学研究法から援護できる視点を，次に考えてゆきたい。

3節　心理学からみた会話装置

研究法の問題に先立って，「そうですね」という会話上の表現を取り上げることの心理学的意義を考えたい。会話は，話し手と聞き手の言葉のやり取りであると同時に，心のやり取りである。そう考えると，発せられた言葉以外のメッセージ，たとえばジェスチャーや視線なども検討対象となる。幸い，エスノメソドロジーにおける会話分析は，この点への配慮を行っているため，心理学的観点から改めて注意を喚起する必要はない。そこで，「そうですね」という発話そのものに焦点を絞って，心理的ダイナミズムを考えたい。

序論で述べたように，「そうですね」から相手の意見を肯定する機能を取り除いたところに，分析する心理学的意義がある。肯定の意図をもたないのに，なぜ肯定の言い回しを使うのか。ここに，ベイトソンのいう“ダブル・バインド”を読み取るべきだと指摘した。極端な場合には，否定する内容が控えていても，「そうですね」を応答の開始時に用いることがある。肯定と否定，相容れない2つのメッセージを，この言葉は発信しているのである。

日常会話でのこのような事態を，典型例にあげることによってデモンストレーションすることは，会話分析が得意とするところである。しかしそれが，どの程度進行し，どのような条件のもとで起こりやすいかを明らかにする作業は，“いまここに”を大切にするエスノメソドロジーの得手ではない。

例示性に満足せず，どの程度蔓延した現象なのかを定量的に明らかにするため，社会学では，適切なサンプリングに基づく社会調査法が確立されている。そこでは，データの代表性を目指した偏りのない標本抽出が重視される。しかし，日常会話における「そうですね」の発話の生きた姿の把握は，アンケート用紙への回答という社会調査法には向かない。質問紙法にとって何より難しいのは，回答者に意識させずに「そうですね」の使用状況を回答してもらうことである。また，どのような会話場面を設定するかという場面サンプリングも容易でない。

心理学でも，科学性・客観性を重視する立場から，調査データによる分析を常套的に用いているが，独自な手法として，実験的操作による要因分析を行う。日常場面での使用から人工的な実験へと観測事態を後退させることにはなるが，その代償を補うにたる利点があると考える。架空の実験状況を例に，具体的に考えてゆこう。

「そうですね」を誘発しやすい状況として，先に“公共場面性”と“肯定の希薄化”という要因を指摘した。まず，“公共場面性”が「そうですね」の出現に関与しているかどうかを吟味するには，他のさまざまな要因の影響が不公平にならな

い群を複数用意し，それらの群に“公共場面性”を違えるという実験操作を施す。たとえば，同一の質問者－応答者ペア（応答者だけが真の被験者で，質問者には実験協力者が当たり，あらかじめ計画された手はずで質問を行ってゆく）に対して，同一テーマについてのインタビューを行う。公共条件では，「このインタビュー場面をビデオ撮影し，それを後日，この問題に関心をもつ人々に聴取してもらう」と被験者に伝える。そして，実際にビデオ撮影しながら，インタビューを進める。もう一方の非公共条件では，先ほどと同じ被験者に，リハーサル，あるいはビデオ収録後の補足として，同一テーマについていくつかの質問を行う。その際，ビデオ撮影は行わない。２つの条件での質問には，テーマは同じだが，具体的内容は異なるものを用意する。たとえば，応答者がよく知っているあるテーマについて，20問の質問を用意しておき，10問を公共条件で，残りの10問を非公共条件で質問する。どの質問をどちらの条件に当てるかは，何組かの被験者のあいだでカウンターバランス（ある質問が一方の条件に偏らないようにバランスよく振り分けること）する。こうして，質問内容は等質で，公共性－非公共性という条件差を背負ったデータを収集し，「そうですね」の出現頻度を比較する。序論であげたマラソン解説者への２種類のインタビューも，この条件設定に匹敵する。

もう１つの“肯定の希薄化”要因の心理学的検討を行うことは，少しやっかいである。と言うのは，心理学実験の要因分析では，構造的に，「条件Ａと条件Ｂに違いがある」という知見を示すことはできても，「両条件での値は同じである」ことを積極的に示すことはできないからである。「そうですね」について，具体的に述べれば，次のようになる。「条件Ａ（肯定的状況）のみならず条件Ｂ（非肯定的状況）においても『そうですね』は同じくらいの頻度で用いられる」ことを示すことが求められている。残念ながら，実験心理学がよりどころとしている統計的仮説検定法では，２つの条件間に見られる量的差違に“有意性”を見いだすことを目指すのであって，“有意な差”が認められないことをもって，両者の等質性を積極的に示したことにならない。それは，「両者間の差の検出に失敗した」ことを意味するに過ぎない。この点が，心理学実験が依拠する統計的仮説検定法の限界である。「非肯定的意味を担った状況での『そうですね』の多用性」を示すには，これとは異なった仮説設定が必要となる。

上に解説した要因分析的実験法は，少なくとも10名以上の被験者に実験への参加を求め，各被験者の示した値の平均値とそのバラツキ具合（分散という）をもとに，量的な差を統計的に吟味するという枠組みであった。しかし，心理学実験法では，集団データではなく，１人の被験者から得られたデータに基づいて条件分析を進める方法も開発されている。Small-N（少数被験者），あるいはSingle-S（単一被験者）実験と呼ばれるものである。「そうですね」について，具体的に解説しよう。

会話場面で比較的「そうですね」を頻発する人を被験者に用いるのがよいであろう。あらかじめ，日常生活に関する質問を相当数用意しておく。まず，被験者と対面した質問者が10種類の質問を行い，それに対し被験者が応答開始時に「そうですね」を何回発したかを記録する。これをベースライン測定条件（セッションＡ１）とする。次に，質問者は別室にゆき，被験者（応答者）のいる部屋の様子をモニターテレビで観察しながら，別の10種類の質問を被験者に与える。被験者は１人で部屋の中におり，スピーカーから聞こえてくる質問に答えてゆく。これを実験条件（セッションＢ１）とする。そして，再び，ベースライン測定条件（質問者が被験者のいる部屋に戻る）で，新たな10項目への応答を求める（Ａ２）。こうして，Ａ１－Ｂ１－Ａ２－Ｂ２－…の系列を何回か繰り返し，ＡとＢの２種類のセッションでの「そうですね」の出現回数を追う。大切なことは，被験者に「そうですね」の出現頻度を測定していることを気づかせないことである。その結果，もし，Ｂセッションで出現頻度が高くＡセッションで低い

（あるいはその逆かもしれない）というノコギリ状の規則的な変化が生じれば，対面場面に比べ質問者が目の前にいない状況の方が「そうですね」は出現しやすい（あるいはしにくい）ということになる（実際には，ＡとＢを規則的に交替させるのではなく，周期性の影響を排除するため，２条件をランダム順にする）。グラフがノコギリ状になるかどうかという視察的分析のみでなく，単一事例における量的変化を分析するための統計法も開発されている（たとえば，バーロー・ハーセン，1984/1988；岩本・川俣，1990）。行動変容（被験者の示す不適応行動に対し，操作的介入を行って矯正してゆくという心理療法）を目指して心理学が開発したABABデザインを，このような形で適用することができる。

エスノメソドロジーの会話分析が見出した知見の何もかもを，実験的条件分析に持ち込んで裏づけをとれ，と主張するつもりは毛頭ない。“いまここに”を重視し，生きた言語活動の中で見いだされた知見には，生活場面から切り離した検討が不適切なことも多い。しかし，実験室状況であっても，発話の文脈をうまく生かした条件設定は可能である。自然に生じる発話行為を観察するだけにとどめず，積極的に「そうですね」の発話を促す（あるいは抑制する）要因を見出すための実験的介入も有効であることを訴えたい。

4節　会話分析と心理学実験の有機的協力

言語学や会話分析では，ある言語行為の意義や特徴を“例示”により主張することが多い。そこで主張されている分析内容が正しいか間違っているかを判断するには，２つの手段をとりうる。１つは，例で示されている事態に対する解釈を，論文の読者が，生活者としての自分自身に照らし合わせて，賛同できるかどうかをもって判断する方法である。読者が，素人でなく，当該領域の専門家である場合には，判断の質は高まる。そして，もう１つの方法は，示されている見解が正しいかどうかを合理的で客観的なデータ収集法で確かめる方法である。言語学やエスノメソドロジーでは，前者の方法におもに依存しているように思う。それに対し，社会学での調査法や心理学実験法は，後者に重きを置く。

両者の姿勢の違いはかなり明確であるが，エスノメソドロジーでは，両者の中間をゆく提案もなされている。山田（1999）の解説をよりどころに，その様子を見てゆくことにしよう。

山田によれば，会話分析の創始者の１人であるサーサスは，入門書の中で「無心の観察（unmotivated observation）」を奨励していると言う。それは，次のようなものである。テープレコーダやビデオに記録した会話をトランスクリプトに書き起こし，それを何度も何度も繰り返し眺めながら，会話の細部にまで注意を凝らす。そして，同僚たちとともにターゲットとなる会話現象を直感的に把握し，さらにその会話現象を産出する方法について，微細な形式的特徴を記述する。このような着想から展開される会話分析の１つの方向性は，実際の会話記録の緻密な観察に基づいて，会話現象を記述し，それを再現してみせる（observation－description－replication）ことだと言う。

「観察－記述－再現」という図式は，実験法の精神に通じるものである。“再現可能性（replicability）”は実験法の重要な特徴であり，上の図式はこの実現を目指しているかのように思える。解説者である山田も，この立場を採用することにより，実際の会話を無視した抽象的な理論化に陥らないですむと評価する。

しかし山田は，このような方向性をもろ手をあげて歓迎することはしない。この方向性からは，観察された現象の再現性を基準として数多くの観察に共通して見られる規則性や形式的構造を抽出するという経験科学への傾斜が不可避的に出てくる点を警戒するのである（実験法はまさにこれを目指している）。会話分析が明らかにしようとしているものは，はたして実証主義が想定しているような「規則」なのだろうか，と彼は問う。ジェユッシやクルターを引用しつつ，彼は次のような

答を提出する。

> 会話分析の発見した「規則」とは経験的に確かめられる実証的「概念」というよりはむしろ，ルールに従ったり従わなかったりすることが，それに対応した間主観的理解（説明）や社会的結果を生み出してゆくという意味で，アプリオリな性格をもったものである。つまり，会話分析の明らかにする「規則」とは経験的規則ではなく，私たちがメンバーとしてコミットしなければならない規範的で道徳的な秩序なのである。だとしたら会話分析とは，メンバーの道徳的秩序への規範的コミットメントが会話という活動を通してどのように達成されているのか明らかにする営みである。したがって，ある文脈に埋め込まれた会話の道徳的・規範的含蓄を理解するためには，会話分析家はメンバーとしての自己の直観に不可避的に頼ると同時に，その文脈についてのエスノグラフィックな知識も必要になってくる。また同時に，分析された結果は読者のメンバーとしての直観に依存して初めて理解可能になるのである。
>
> （山田，1999 p．15-16）

いったん近づきかけた実験的精神とエスノメソドロジーは，再び袂を分かつ気配である。ここで，安易な妥協は行うべきでない。それぞれが，自らの特徴あるパラダイムに則って，同じ問題に多面的に立ち向かう“三角測量（triangulation）”的姿勢こそ健全な方向性と考えられるからである（三角測量（triangulation）の有効性については，吉村（1998）を参照してもらいたい）。

その意味から，三角点の一角を担う言語学，特に社会言語学からの取り組みが重要となる。たとえば，田中（1993）の解説書に紹介されているバーンステインのコード理論が目を引く。そこでは，次のように解説されている。

> たとえば話すことになれていない人が，インタヴューで意見を求められたり，人前で話すよう求められた時，ふだんはおしゃべりな人でもかなりな困難を感じる。単純な短い文章を，「そして」でずらずらと続けて，いわゆる「こどもの日記」スタイルにおちいったり，修飾語は「たいへん」，「すっごく」の連発になってしまいやすい。こうした話しかたは，ついつい身ぶり手まね，こわねが大げさになって，ことばの足りないところを補う度合いがたかくなる。こういう話しかた，書きかたを，バーンステインは「制限（された）コード」と名づけた。
>
> （p．168）

「制限（された）コード」に対して，状況や文脈に依存することなく，それ自体で理解可能なコードのことを「精密コード」と言う。本稿で取り上げている「そうですね」は，状況から切り離してしまうと意味が分からなくなる「制限（された）コード」の典型と言えよう。エスノメソドロジーに心理学と言語学を加えた三者から「そうですね」に立ち向かうことで，文字通り三角測量（triangulation）体制が整うことになる。

本稿では，「そうですね」という言い回しを，〈質問－応答〉ペアにおける“ショック・アブソーバー”の機能を果たすものと位置づけた。しかし，それは，多用されている「そうですね」の一部を捉えたにすぎない。〈提言－承諾〉ペアでの承諾（肯定）のメッセージを担う機能，〈相づち〉としての機能など，多面性をもつ言い回しである。“肯定”“相づち”を表現する際に「そうですね」を使うことに込められた発話者の微妙なニュアンスを特徴づけてゆく作業もまた必要であろう。おそらくそれは，これまでエスノメソドロジーや社会言語学が培ってきた分析法で検討を開始することが，最も有効な道筋であるように思える。

おわりに

濫用とも思える「そうですね」の多用化は，今後，さらに拡大してゆくのだろうか。最後に，言葉の“錆びつき”と“すり減り”という問題を考

えてみたい。卑近な例で恐縮だが，「トイレ」のことを現在，会話では「トイレ」または「(お)手洗い」と言うのが普通で，「ゴフジョウ」「かわや」と言う人はいない。「便所」という言い方さえ，あまり聞かれなくなった。そこで，たとえば「便所」という言葉のこれからを考えたとき，使われる状況や頻度が今よりさらに少なくなれば，錆びついてしまって，話し言葉としての役割を終えてしまうかもしれない。逆に，使われすぎるとどうなるか。便利で多用されていても，やがて耳につき，心地よい言い回しと受けとめられなくなる。筆者は，「そうですね」を耳障りだと感じ始めている１人である。酷使された「そうですね」は，やがてすり減って使いものにならなくなるのかもしれない。

摩滅したタイヤは廃棄して新しいタイヤに変えることができるが，言葉の場合はそうはゆかない。便利だから多用されてきたのであり，その便利さを享受することへの必要性が減ったわけではない。その必要性は，新しい状況へ吸収されてゆかなければならない。エスノメソドロジーでは“いまここに”を大切にする。心理学でも，もっぱら現在の状況を対象としてデータ収集を行っている。その意味で，過去・現在・未来という通時性を分析枠組みに取り込んでいる言語学への期待が高まる。健全な三角測量（triangulation）体制として，分業の上に構築された有機的連関性が，今後ますます必要になってくると言えよう。

引用文献

バーロー，D．H．・ハーセン，M.『１事例の実験デザイン』二瓶社，高木俊一郎・佐久間徹（訳），1988（原著，1984）

ベイトソン，G.『精神の生態学』上・下　思索社，佐藤良明・高橋和久（訳）1986　（原著，1972）

岩本隆茂・川俣甲子夫『シングル・ケース研究法』勁草書房，1990

ガーフィンケル，H.「日常活動の基盤―当り前を見る―」G．サーサス・H．ガーフィンケル・H．サックス・E．シェグロフ『日常性の解剖学』マルジュ社，北澤裕・西阪仰（訳），1995，pp. 31-92.（原著，1964）

西阪仰　「会話分析の練習」　好井裕明・山田富秋・西阪仰（編）『会話分析への招待』世界思想社，1999，pp. 1-35.

田中克彦　『言語学とは何か』岩波書店，1993

定延利之・田窪行則　「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識『ええと』と『あの（ー）』」『言語研究』108，1995，74-93.

山田富秋　「会話分析を始めよう」　好井裕明・山田富秋・西阪仰（編）『会話分析への招待』世界思想社，1999，pp. 71-100.

吉村浩一　『心のことば－心理学の言語・会話データ―』培風館，1998